

●初心再検

俳句は自得の芸であろう。自得の道であろう。俳句がうまくなる簡便法など何もない。『うまい』ということにも疑問がある。

とすれば、私には啓蒙趣味など毛頭ないが、——もう一度初心にかえて、せめてこんな点ぐらいいは己で責を負わねばなるまい。

単なる報告ではないか。(事実を真実へ)

つきすぎではないか。(常識)

誰かやっていないか。(手垢のついた類型)

ひと様に分かるか。(伝達性)

解説ではないか。(答えをだすものではない)

陳腐な趣味ではないか。(素材と発想)

しんどくはないか。(祝祭とめでたさを)

せめてこのくらいは押さえなくてはなるまい。こどものしつけのようなものである。これらに該当したらいさぎよくすてるか、逆発想へ転換すべきであろう。これらの技術的禁忌から一步を

すすめるのが「俳」というもの。その上で、それぞれ己の俳句がある。

作品には、時空観、存在観、人間観、言語観、俳句観が必須である。「虚に居る」ということである。その上、虚が言語化される、または言語によつて物質化される、これがまた必須。そこに俳句づくりの醍醐味がある。

その時、虚は、直接であれ間接であれ、全人的に表徴する。そうありたい。しかも虚はしらべだけでも成立する。無意味界でも成立する。

——選をしながらいつもこんなことを思う。

●昨日ノ我ニ飽ク●

「昨日ノ我ニ飽ク」ということがある。芭蕉さんが言っている。

何故、昨日の己に飽きないのかなあ、——見わたして私はそう思う。

私は、すでに分かったことにははやばや頓着はしない。納得はくり返すかもしれないが、それが身についたときには、どんどん放ほうつてしまふ。放てば手に満つ。心配しなくとも、次から継ぎから、何かは湧くのだ。そうすれば、誰にでも、何かは湧く。

もとより、生涯一情もよい。文体を確立した人はそれを推し通せばよい。己の世界観・俳句観を確立した人はそれで貫通すればよい。

ただし、自己否定なしには「昨日ノ我ニ飽ク」ことのできないのも当然の命運であろう。芭蕉さんは、陸続と己に飽きた人、であろう。最もマンネリズムを憎んだ人である。

年齢にはかかわらないと思うが、特に若い人は、先人の、発想、表現などの遺産を徹底的に自家薬籠中のものとして、いちはやく老成した世界をひとたび完成してしまふがよい。その時「昨日ノ我ニ飽ク」からである。また、老翁の枯淡・円熟、それも尊かろうが、さらに老童の、「昨日ノ我ニ飽ク」稚氣・客気はより大いに絶景、芽出めだたいにちがいない。

否定することこそが伝統を作る。

● 抽象・具象 ●

思ったことは見えるように詠まねばならない。

俳句は、ついには抽象、哲学と私は考えているが、その抽象、哲学、観念^{イデア}を、そのまま生^なまの抽象語、哲学語、観念語で表出しても、それは到底、哲学や散文にかないはしない。

はやばやと、抽象語・観念語を使つては、はやばやと伝達力、説得力を失うばかりである。もしくは先蹤の轍をふむだけである。あるいは、言葉が浮きあがるだけである。それは観念という常識にとどまるだけのことである。

一般に、抽象は具象に還元して詠まねばならぬ。観念はモノに還元して詠まねばならぬ。

その故に「写生」が発生し、かつ問われるわけである。「思ったことは見えるように」は、その辺の事情を指すわけである。写生力、具象表現力、体感での直^じかなる表現力の際限ない修練は必須である。

もし観念語を一句の手に使うのならば、その無理のない必然にまで定着させて使わねばならぬ。ついでに、逆に、描写、具象表現力が十分あったとしても、それが何のイデアも誘発しない、たとえば取材主義や身辺報告の写生ならば、私は作品としてそれを採らない、ことも申しそえておこう。

●切字●

切字こそが俳句の核。

季語が俳句、と一般に言われるが、それは「有季定型」の声にただ無為に覆われている点がないわけではない。芭蕉は「たまには無季の句があつてもいい」などと言っている。(尤も私は、無季の句は作らない。本義を伴った季語は必須としている)

芭蕉の中心核は、「造化」である。

その全体膨張像が「虚」である。

その中に「四時」観がある。

——そうとつた方が正確な芭蕉の理解であろう。

その芭蕉の体系の、表現体系の要・核をなすものは「切字」である。

切字によって、造化・虚は提示される。

切字でもって、磨かれた言葉を嚴格に使うことによつて「無常」という現実を超える力を獲得する。伝統的表現という禁じ手のみを使つて造化・虚を獲得するには、それしかない。

いま日本語が低俗に流れ、付句・平句または叙述体のだらだら表現力しか持たなくなりつつある状況は、大いに困つたことであろう。

たとえ文語体でなくとも、切字感覚を失つてはそれはもはや俳句ではなくなる。

一句は、俳諧における発句のごとく、切字でもって三十五句を呼び起こす力を持っていなければなるまい。

深く「切字」に参入したい。

●「をかし」の認識●

思ったことは見えるように、ことばはふつうにこころは深く、なきけはおかしく、切れがあつてこくがあつて、まともで外はずれて、低くて高くて……ま、いろいろ。

それにしても、俳句、つまり「俳の句」は、元来が俳なんだから、なんぼまじめに心つくしても、どこかに「をかし」の系譜をひいていなければならぬであらう。系譜などと大げさに言わなくとも、血の通つたにんげんのおかし、イキといつてもいい、そんなところがなくてはならぬであらう。それがなければ「俳」でなくなるから……。

俳味、俳意、風流、滑稽、諧謔、挨拶などとはそういうところをさす。それは外道などではない、レッキとした俳句の本道なのである。それが風流のころざしというもの。

其角を慕つた沾徳に、「山鳥の尾といへば歌、雉子の尾と云は俳也、少のちがひ也、山鳥の尾幽玄に聞ゆることば也、俳諧の上にて幽玄をいはゞ雉子の尾などいふ、幽玄なるべき事ながら左にはあらず、俳の幽玄は外也、俳諧の自由は低き場にて高きをいひ、高き場にも低きをいふ、其上は作者の器量次第の句品なるべし」ということばがのこつている。

「をかし」の認識こそ、俳句の本筋である。いま俳句は「あたりまえ」に墮しすぎている。ただし、「をかし」をねらつて作り事にしてはいけない。そこが、品・器量というもの……。

●まず芭蕉を読め●

もつと芭蕉を読め、読み込め、と言いたい。

選をしていて、この人は本当に芭蕉を読んでいるのであろうか、真剣に芭蕉と取り組んだことがあるのであろうか、という疑問にぶつかるのが、実は大方である。なげかわしい。

私は実は、芭蕉が究極、すべてと考えている者ではないが、しかしながら、俳諧・俳句史を概観するとき、常識的には芭蕉に大方のすべてがある、としてよい。極論するなら、芭蕉をやつて己をやればよい。後は無視してもよい。芭蕉をやれば、後は其角も、蕪村も、子規・虚子もその後の現代俳句も自らついて来る。その芭蕉を読まない、とは情けない――。

●靈性即身—よつて来るところを—●

造化。

よつて来るところ、である——。

平明、平明のかけ声はよいとしても、いま、日本語の質の魂ぬけ、低下、俗化、崩壊はいちじらしい。

韻文精神も失調している。

俳句は、ただごとの報告、説明、解釈で充ちている——。平明というよりは平俗卑俗の風俗消費俳句で充ちている——。

いま、その、氣の世界を整えて、氣は「よつて来るところ」へ流さねばならぬであろう。造化とつながらねばならぬであろう。

現象はもちろんそのことへの媒体としなくてはならないであろうが、その現象・媒体をいくら蒐集のみしても、それは造化へつながらるものではない。さような客観写生の帰納法は、いくらあつめても重ねても、造化へはたどりつかないであろう。

造化は直観・神の観法においてのみ、存る、在る。

それは劫初から存在した、宇宙の真理。宇宙即人、人即宇宙。神即人、人即神。また、すべての存在・生命が創造神。そこに気づかねば。——その直観においてのみ造化は具象化される。

その演繹において俳句は成り立つ。アニミズムもエロチシズムも、わび・さび・しをり・かろみも……。そこで訴えたい——。

靈性即身。

● 実の継続 ●

もつと単明に！

もつと見えるように！

もつとモノを！ もつとモノで！

もつと実を！

と訴えたい。その時はじめて虚が見えてくる。そこに詩がある。そこに俳諧が展開する。

くどいが何度も言おう。発想と表現と。これは必須の、車の両輪。常識は超えなければいけない。単なる報告はいけない。解説をしてはいけない。言葉もたれはいけない。類型はいけない。本を読まないのはいけない。……さような格に入った上で——格を出て、己の破格な文体がほしい。平明にしてなおかつ「危所」にあそぶ己のものを表現してほしい。私は今、「槐」を、微温化した年功序列型の、宗匠俳句の、馴れあいの、仲よしクラブの、バブリーな、存在無用の俳誌に墮落させたくはないのである。質を低下させたくない。そこで、投句を五句とし、己に自ら厳しい修練を課することを要求したわけである。それに耐えられなければ一人前にはならない。自分

自身のことである。これに耐えられなければ人生そのものにも耐えられないであろう。五句投句に不満があるようであるが、むしろこれが基本。甘やかしてはあなたが損。そこに臍はらを定めて、自在に継続していただきたい。継続こそが才能。ただし、続けなければ続かない……。

●俳句の定則●

俳句は配合、二物衝擊、アンビヴァレンス、二つの相異なる事物が結合される詩。

俳句は韻文としての響きの詩。定型。音楽。(口語体は可としても、そこに切字感覚は必須)

俳句は、わかつてくれる人が一人あればいい詩。一箇半箇てんかに伝衣てんねすればよい。へよくわかる、それがどうした」というのは俳に非ず。

俳句は寄物陳思の詩。モノで投げ出すことが根幹。かつ思は暗に、背後に、心象・暗喩で陳べたい。その意味で俳句は抒情を詠ってはいけない詩。俳句的抒情と通常の抒情は別。故に、抒情、心理、感懐等々、他の詩型に任せばよい。心を詠むはいいが、情を抒(叙)するは如何であろう。叙情は俳句の一部。

俳句は、いわゆる写生が正道に非ず。時間を詠む詩。モノ、刹那に永劫を詠みとめる詩。近代の写生主義は否定した方がよい。

俳句は、諧謔の詩。宇宙的諧謔の詩。諧謔即宇宙、笑い即宇宙、批評即宇宙の詩。

——その他いろいろ言えようし、また別の提示の仕方もあるが、せめてこの辺の原則、定則は常に意識しておきたい。心得ておきたい。基盤にしたい。

ただ、幾度もくりかえし言うが、時空・抽象は必ず具象化しなければならぬ。観念語を使つ

てはなほなる。靈性は見えるよらへん、または実感覺に還元して表現に乗せなればなる。デジタル信号はアナログ映像に——。具象こそ俳句の俳句たる所以、^{ゆえん}または条件、または定則。こわれが、しばしば詠いで、内蘊しなものは何故なる。詠み手は「あつた」の精神、決意がなからずはなほなるか——。

●認識の刻印●

俳句は哲学。

俳句は認識の刻印。

認識の刻印なくして、抒情も諧謔も存問もない。いわんや超越もない。俳句は寄物陳思。

その根本の認識が、甘すぎはしないか。

俳句から、なろうことなら、意味を去りたい。物語性を失くしたい。機会詩的な報告をなくしたい。限局的な心理や感情や感懐の叙述を脱したい。知的操作による解釈・解答の域から脱したい。モノに還元しないコト俳句は非。直情・直叙は他の詩型に任すことだ。

なら、それはどうすればいいか。

モノを投げ出せばよい。モノとモノを投げ出せばよい。モノの象徴力についてくいい込んで、その象徴力の全質量を投げ出せばよい。かみあわせればよい。

その時、作者は断定の快感を得るはずである。認識の刻印の快感を感じずるはずである。読者も

感ずるはずである。俳句はふっきれの芸。

そこに俳句の絶景がある。快感のない俳句は、弱い。魅力に乏しい。どこかに欠落部分がある。快感とは瞬発と残響。

モノとモノの照応は場を醸成する。存在は場を得る。そのときコトは俳句として成り立つ。精神は時間場。しかも精神は物質に連続する。

俳句は哲学。但しその魅惑は「観念の形」では成らない。超越への出発はそこからである。

●モノと切字●

モノと切字、それが俳句の真髓、骨髄。

もとより、精神の位相、その人の宇宙観、……に於てではあるが。

それはたびたび言つてきた。「モノを投げだせ」、「モノとモノを投げだせ」と。「実即実と投げだして、それが反転して虚であつた。色即色と投げだして、それが反転して空であつた、——そう私はつくる」とも。

別に「俳句モノ説」に傾くわけではないが、それを唯一の基準としてゐるわけではないが、今日の俳句界においては、「槐」の連衆も含めて、余りにも、モノを投げだす態度を身につけていなさすぎる。モノそのものを見なさすぎる。事柄に片寄りすぎている。事柄の報告に傾きすぎている。皮相平板なのだ。

いま、モノが観えないで何が見えるというのであろう。モノ・季語の象徴力、本義、時間、文化を徹底して観照し、その「虚」を信ずる必要がある。それをやらないで「投げだす」ことはできない。

モノの見えたるひかり、こそが投げ出す世界。

事柄俳句から脱却したい。

但し、事柄俳句がモノをしかとおさえ、モノに還元できる表現力、認識をもっていれば別。

切字は、「不連続の連続」をなす俳句時空の要。饒舌から脱する必須の核心。省略、象徴の起動力。いま饒舌に過ぎる。理屈の解釈が多すぎる。従つて象徴力にはならない。——作品は弱い。

作品をなさない。

●持ち味。己が甘えを脱して●

人にはそれぞれの持ち味がある。

作品、俳句もとよりそうである。

私は、表現手法の各論については極めてきびしい禁じ手を要求はしてきたが、全体像としてはその表現者の持ち味、長所を極力伸ばし、短所をあげつらうことを避けてきた。当然のことである。それは各事例に当たりながらいくらか点検しても、間違いではなかった。今後この方式をとりつづけるであろう。念のため、「個性」などというものではない。「持ち味」である。「持ち味」は表現者の魂・心から滲み出るもの。世界観から湧き出でるもの。靈キを直覚認識しそれを刻印出

来得るからだからの表現。それがあなたの「持ち味」。

ならば、人の言うことにはかまうな、人のやり方にはかまうな、自分のやり方で伸び伸びとやれ、自分は自分なんだという自覚が大事、ということになる。他の人と比較するな。要は、俳句は自得の詩。

そのところの自己責任感が甘いのではないか、と思う。何で三句を二句に落とした、いつも不成績で採られない、などの不満は、己の不努力を棚に上げた自我主義の甘えにほかならない。世の中の、そして己の甘えの構造から、みずから果敢に脱出しなければ、せつかくの己の「持ち味」すら失ってしまうであろう。他を責める前に、心したい。甘えてよいのは大宇宙だけ……。

●表現主義を排す―発想と表現―●

発想と表現は車の両輪。

対。そのどちらが欠けても車ではなくなる。法輪ではなくなる。

発想即表現、表現即発想。でなければ詩・俳句は構成しない。

その上で、表現主義（念のため主義）にはくみしたくない。

ことばは魂の逆も亦。

その真実の上で、ことばをもてあそび、形容し、美化し、私意をはたらかせて（たとえば何々にさせなどという表現）技巧化し、エンターテインメント化するほどのことばあそび・表現主義には、私はくみしない。

強いて言えば私は発想の方を重んじたい。発想六分に表現四分、いやいや発想百パーセントに百パーセントの表現、をこそ求めたい。すくなくとも表現主義ととられかねない所へおちこむ芸は避けたい。

むろん俳句はうまくなければならぬ。だが「うまい」というボロを出しては、俳・俳諧・諧謔は希薄となろう。技巧に陥つてはなるまい。

口先だけのことばは無用であろう。表現主義（大抵本人はそれも気づいていない）の句には、ふしぎも感動もデーモンも大歓喜の戦慄もない。どう考えてもオモロクない。アルチザン（芸職人）のみならず詩人・創造者でありたい。なろうことならその三位一体の霊的人間でありたいともかくさしあたり、表現主義は排したい。その上で、伝達は表現を待つて達する以外にないことを決定しておきたい。

●モノとコト―事柄俳句を排す―●

事柄俳句は不可。

さしあたりそのぐらゐの覚悟を、まずしておきたい。

ただごとの報告、解釈、解説は詩の領域、俳句の範囲ではない。知性・頭で作った理屈は詩ではない。俳句ではない。

詠みたい事柄は、その媒体となる対象・モノそのモノで表すにとどまらなくてはならない。それで十分。それ以上の事柄は不要。そのモノを投げ出せば十分。そのモノの象徴力をもつてすれ

ば十分。そこまでで十分。言いたい事はその言外にあつてこそ強力。そのためには物・モノの本質・本義・象徴力・靈性を見抜かねばならぬ。直観、直覚しなければならぬ。

そこへの感性の磨きに、渾身の志が投入されているであろうか。

物とは靈^{モノ}。

その観照底を諧謔の線上に乗せた時——俳句。

その時こそ、宇宙も人間も人生も、具象で詠み得る。俳句となる。

モノは私。私は靈^{モノ}。

その直観造形において、「あたりまえの不思議」は表れよう。自己完結への狭量な表現世界はおのずから消えよう。

事柄俳句を為す場合は必ずモノで押さえておきたい。

●俳句は存在の詩●

俳句ハ存在詩。感情詩ニ非ズ

と言つておきたい。

俳句は、存在の詩、存在の——認識の刻印の詩と言つておきたい。感情、情緒はそこについてくるもの。

存在に気づきもせず、それを観ることもせず、認識することもせず、刻印することもせず、——それではそこに俳句が成立するわけがない。

感情、感懐、心情、心理、境涯をナマで、ジカに説明、解説、報告してはモトもコもない。それは詩にも俳句にもならない。

俳句は存在^モ霊、そのもので出て来なければなるまい。

ただし、相手は俳句だから、それは俳位、俳諧位、諧謔の場でおこなわれねばなるまい。

俳句は自得の詩。

俳句はアタマで作らずカシダでヨクへる詩。

俳句はどこかに人間証明、宇宙証明がなければならぬ詩。

●引き算●

一句が「弱い」ときには、どのような原因があるものであろうか。

第一。常識である。類型である。

第二。モノで投げ出していない。モノでかためていない。

第三。修飾のしすぎ。形容詞、主観語の使いすぎ。逆に言えば、俳句はモノだけで十分。名詞だけで十分。もしくは名詞と動詞だけで十分。

第四。切字の不足。立句（独立性・垂直性）がなく平句（水平位）に流れてばかりいる時。少なくとも切字感覚の不足。ふつきれがない時。

第五。それにかかわって、平句という事柄俳句。モノを以てしかと押さえていない事柄報告俳句。——ほかにもあろうけれど、さしあたりこの辺が「弱い」理由となろう。自分の作品をその線上で再点検してみてはどうかと思う。

いずれにしても、俳句はものの言えない詩。ものを言っではいけない詩、言っではならぬ詩。無限に引き算の詩、その果てに掛け算に転ずる詩。その原点・基本をからだにしみこませたたみ

いそいでおかねば、俳句にはなるぬきぬき。——きの時、諧謔も、麗作も、俳句の真面目、俳句の力學も潤然とあらわれよう。

しかもそれは、所詮自得しなけたば、いそいでぬきぬきのだ——。

不易も新しきも、いそいで^{けうこ}決定しよう。

●修飾語を去る●

俳句は存在の詩。

存在即諧謔の詩。俳諧史・俳句史を正しくたどれば、それ以外の何ものでもない。俳句は俳諧の世界観で充たされていなければ、その本質を失う。

かつて山本健吉も言った。俳句は、滑稽、存問（挨拶）、即興である、と。他に条件はあろうものの、それはやはり俳句の本道であろう。

その時、特に存問、存在に対する問い、——これを核に据えたい。存在を投げだせばよい。

その存在を問うのに、存在に対して挨拶をするのに、存在を滑稽・諧謔ととらえるとき——その表現の時点で、修飾語は要らない。形容詞は要らない。

修飾語・形容詞は、まずただ単に己の感情・情緒・心理・その解釈・説明におちいるだけが大方向である。修飾語はその時の己の一面、表層のみをしか語らない。物事の本義本質を限局してしか語らない。

修飾語に身をのり出しては主体・本質を見失う。飾る勿れ、シナを作る勿れ、美辞麗句に溺れる勿れ、冗漫に流れる勿れ、常套の形容詞を去れ、と言いたい。

最小限の表現で最大限の時空を表現せよ、つまり存問せよ、と言いたい。表現は名詞・動詞・てにをは（助詞）を主軸に、修飾語は必要最小限にとどめたい――。

事物がそこにある。なぜそれに手を加えるのか。

ただ、形容詞が事実よりも真理を詠み、一句の核心をなし、一句の音楽の主旋律をかなでるならば、それはそれで有効ではあろう。